

青少年地域活動ふるさとを見なおそう 第1集『長門昔ばなし』より

たてしなやま こうがさぶろう

## 蓼科山と甲賀三郎

むかし蓼科たてしなのすそに小さな村がありました。ここに甲賀太郎・二郎・三郎という三人の兄弟がありました。三人は若者になりそれぞれお嫁さんを迎えました。

ところが末の三郎のお嫁さんは、とっても美しいお嫁さんでした。二人の兄は『三郎の奴やつあんなきれいなお嫁さんをもらって生意気だ。』とばかり嫉妬し、三郎を連れ出し蓼科山たてしなやまのいただきにある岩穴にやってきました。

穴は人がやつとはいれるくらいの大きさで、中はまっくらで『オーイ』と声をかければ、その声はどこまでもとんでいってとまりません。二人の兄は三郎に言いました。『三郎や、この穴は龍宮りゅうぐうまでつながっている。はいつて見ろ俺達も行く。』といって、付近に生えているクヅ葉藤ばふじのつるを集めて藤籠ふしかごを作り、三郎を藤籠に乗せ岩穴につりさげました。

なにしろ岩穴は龍宮まで続いている穴ですから、あたりに生えている藤づるはみんな取ってしまいました。藤籠がいいかげんにさがったとき、つりさげられていた藤籠は、あつというまにすうつとくらい穴のおくにそのまますい込まれてしまいました。

二人の兄が三郎をだまして、藤を途中から切ったからです。三郎は、まっくらな世界を手さぐりでさまよいあるとき、力つきて死んだようにたおれてしまいました。

それから、どのくらいたったことでしょうか。ふと三郎が気がついてみると、りっぱなごてんにねかされていきました。

そこは龍宮だったのです。庭には一年中いろとりどりの花が咲きみだれ鳥がうたいおいしい食べ物がつさり、お話に聞く楽園そのものでした。

あつと言うまに十三年がすぎましたが、いつも三郎の頭の中からきえないのは、美しくてやさしい妻の顔でした。どうにかして蓼科のふもとにかえりたい、大勢の人がとめるのも聞き入れずわかれをつげ、すこしも休まず闇やみの中をひたすらあるきつづけました。

やっと待ちに待った地上近くまで来ると頭の上がぼうつとかすんでいたのも、そこから抜け出そうとすると、それは浅間山のふもと小沼おぬま（御代田町みよたまち）にある真楽寺しんらくじの池で三郎の体はいつの間にか、蛇身じゃしん（へび）になりました。

三郎はへびになった自分の姿をみてかなしみましたが、蓼科たてしなをめざしてまっしぐらにのぼりました。蓼科山のてっぺんにたった三郎の体は岩にぶつかり木の根につきさとり血だらけでした。身も心もつかれはてた三郎は大声で妻の名を呼びながらたおれてしまいました。

そのとき遠くの方から細い女の声で『三郎さーん。』と聞こえてきました。その声は恋こいしい恋こいしい妻の声だったので。『三郎だよ、三郎だぞ。』いうが早いか三郎はガアと空にとびあがり龍の姿にかわりひとつとびに空をつっ走り諏訪湖すわこのまん中へバシャンととび込みました。

まえに三郎を蓼科山でうしなった妻は悲しみのあまり龍になって湖の底にさみしく住んでいたのです。

二人はいつまでもいつまでもだきあっていました。